

* 帝国陸軍の戦闘機が引っかかった 60m 鉄塔検証

ーその4、ロンビックアンテナが立つ前にあった逆Vアンテナー

アーカイブ室新聞 164号、172号～174号に60m鉄塔検証の記事を書いた。この60m鉄塔は昭和18年に調布飛行場を離陸した帝国陸軍の戦闘機がこの60m鉄塔に接触して墜落するという戦時中の機密事件があり、興味深いので調査をしていた。この60m鉄塔は昭和20年4月にこの事件が直接の原因となって軍の手で撤去された。東京天文台90年史には、下記の文章がある。

高さ60メートル4本の空中線鉄塔は、昭和18年8月軍用機がこれに触れ、墜落するという事故が直接原因となって、終戦を眼の前にした昭和20年(1945)4月、軍の手で倒され、以後木柱アンテナ数本に頼っていたが、IGY(1957年～1958年)を期して、再び高さ25メートルの鉄塔4基が立てられ、さらに昭和39年(1946)自立式鉄塔一基が追加された。また昭和35年(1960)には方向探知用アンテナが設置され、報時受信資料の解析に有力な武器となった。

この記事によると、高さ25mの4基の鉄塔(ロンビックアンテナ)が立てられるまでは木製のアンテナ数本に頼っていたとあるが、筆者は写真1のようにかなり高い鉄塔が写っている写真を発見した。

この記事中、昭和39年(1946)自立式鉄塔が追加されたとあるが、1964年の間違いである。この写真1の手前には、電波天文学が始まった頃の電波望遠鏡が数基立っており、明らかに戦後の写真と思われる。この写真に写っている電波望遠鏡、高い鉄塔について宇宙電波天文の祖である赤羽先生に何かご存知ないかと手紙でお尋ねしたところ、電話でいろいろお話を伺うことが出来た。このような鉄塔は、桜並木の北側33号～34号官舎付近にもう1本あった、電波関係者はこのアンテナを「逆Vアンテナ」と呼んでいた。このアンテナは高く電波観測の支障になったそうである。このアンテナは、国際報時所が世界中の報時信号を受信していたが、昭和23年国際報時所は東京天文台に併合されたとのことであった。この写真に写っている電波望遠鏡は鈴木(重雄)さん、土屋さんなどがやっていたそうだが、鈴木さんが天文台に在職されたのは昭和24年2月～昭和39年11月であるから、ここに写っている鉄塔は戦前にあった60m鉄塔ではない。この鉄塔について詳しいことが知りたければ、飯島重孝さん、原さん(孝)、松本さんなどに聞いてみろと言われた。飯島さんの現在の消息を知らないので、天文時部の古い人たちに尋ねてみようと思

う。上の記事にある木製のアンテナの残骸は昭和 41 年に筆者が三鷹に転勤で来た時にはまだ数本立っていた記憶がある。現在の太陽フレア望遠鏡の西側辺りの広場に立っていて、野火が出た際、このコールタール漬けの電柱のような木柱が燃えたのを覚えている。

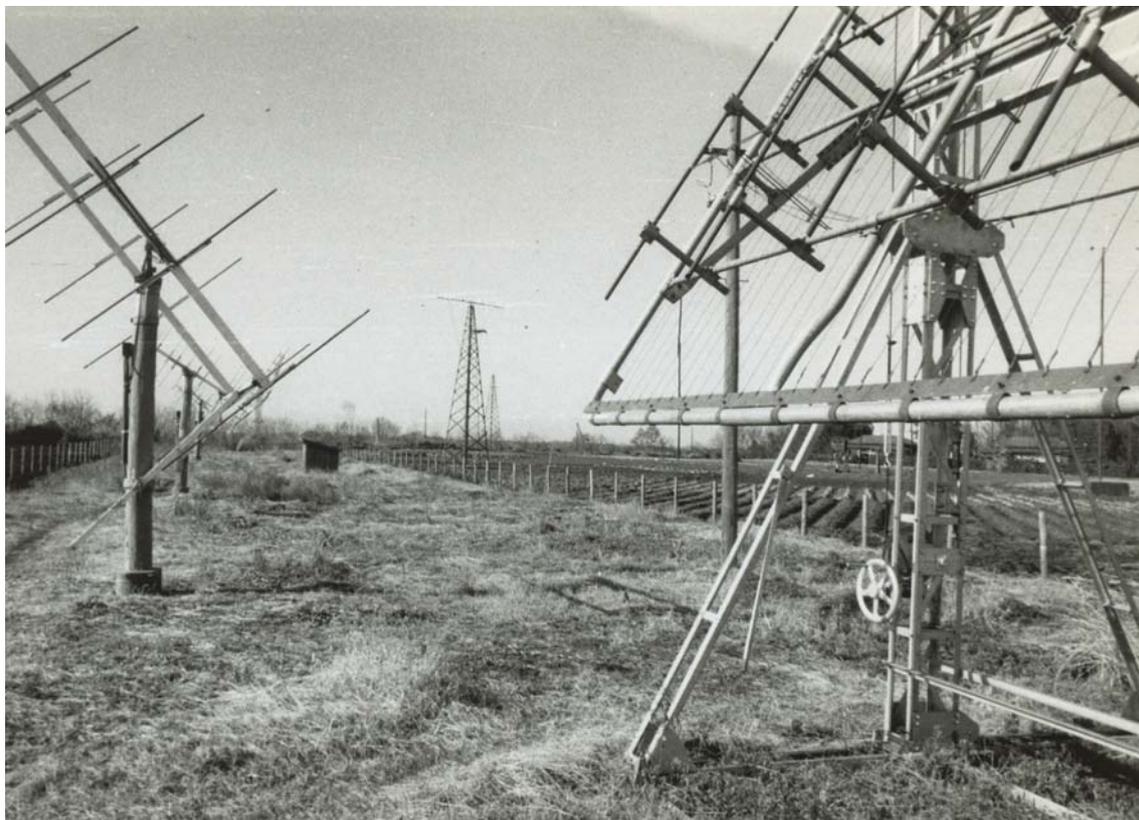


写真1 中央に高い鉄塔が見える写真

この「逆Vアンテナ」は昔の東京天文台の絵葉書にもはっきり描かれている。写真2はその絵葉書の一部を取り出したものだが、東京天文台構内の1本杉と呼ばれた（その1本杉の下には小さな祠があり、今でもその場所近くにはお賽銭が置かれている）木の東側から眺めである。この絵葉書にはこの「逆Vアンテナ」3本見える。



写真2 東京天文台絵葉書に描かれた「逆Vアンテナ」

昭和 39 年に立てられたという自立式鉄塔 1 基(⑤)とロンビクアンテナ(①、②、③、④)は東京天文台 100 年史の口絵写真(写真 3)に見ることが出来る。

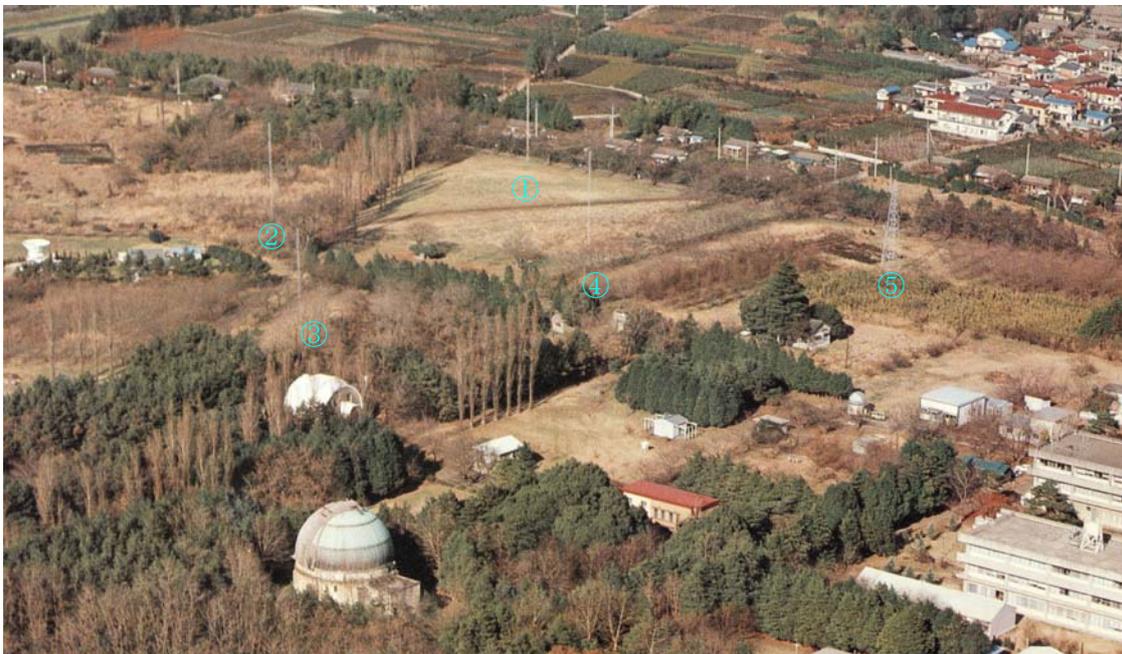


写真 3 ロンビクアンテナと自立式鉄塔

写真 2 の絵葉書に描かれた 1 本杉は現在では枯れ、切られているが周りの榎は残っており、現況は写真 4 のようである。



写真 4 1 本杉の現況 (写真 2 と同じ現場)

赤羽先生のお話では、先生が建設された 24m 球面電波望遠鏡（写真 5）が 60m 鉄塔のステアーの足である巨大なコンクリートの塊 1 個が邪魔になり、東に移して建設せざるを得なかったそうである。ということは 60m 鉄塔の 1 本はその近辺に立っていたことになる。



写真 5 固定式 24m 球面電波望遠鏡

この 24m 球面電波望遠鏡は、現在の自動光電子午環の南側子午線標の西南辺りにあり、競輪場とも呼ばれていた。この電波望遠鏡の関連の小さな建物が 1 棟残っている。その辺りの航空写真が写真 6 である。



写真 6 固定式 24m 球面電波望遠鏡の写った写真